# 法海

―― 今回のテーマ ――

## 現実を生きる人のための真宗とは

今回は本学人間科学部で講師を務める宇治和貴先生に、ご自身が感じていた「真宗への疑問」をどのように解決してこられたか、その過程についてご寄稿いただきました。

### 学生時代には疑問だらけだった「真宗」の存在意義

「浄土真宗での救いとは、死後に浄土へ往生することだけをいうのだろうか？」

私は真宗を学び始めてすぐに、こうした疑問を持ちました。真宗での救いが死後だけならば、現実を生きる人にとって不必要な宗教となるのではないか。人間は何もできない凡夫だからといって実践をあきらめるならば、他力は人間の努力を認めない思想となるのではないか。だとすれば、真宗は悩み苦しむ人々を支える宗教といえないのではないか。などの疑問が次から次に起こり「このような宗教では、同世代の友だちに自信を持って話せない」といった思いを強くしました。学生当時、こうした疑問をもった理由は二つあるように思います。一つ目は、寺院に若い人が来ないとか、仏教に若い世代が興味をもたないといった現状を自らが成長する過程で経験してきたこと。そして二つ目は、私自身が現在の仏教を腐敗・堕落した葬式仏教そのものだと認識していたことでした。仏教へのこうした認識は、現在でも多くの若い世代の方には共通するものではないでしょうか（このような感覚は、職業として僧侶を選択し生活する中で、いつしか摩耗・消滅していくものかもしれません）。

### 「真宗の常識」とされたものが、勉強し直すことで覆され…

疑問だらけの学生時代の私に説明された真宗は、こうした疑問に応えてくれるようなものではありませんでした。なぜなら「どのように生きるか」といった、生きる上での価値基準として真宗を説明する論理＝「教学」が成立していなかったからです。そこで「親鸞という人はどのような生き方が成立する宗教を浄土真宗として説いたのか」といった疑問を解決するために、真宗に基づく生き方＝信仰を彼が生きた具体的な歴史状況と対比させながら考えてみることにしました。すると、親鸞が生まれるずっと以前から、称名念仏を称えれば悪人が阿弥陀仏によって救われるといった思想はひろく民衆のレベルまで浸透していたことや、聖道門といわれる人たちも含めて仏教者全員が浄土を願っていたことなどを知りました。これまで親鸞の発見だと言われ、私自身もおぼろげにそうだろうと理解していたことが、ことごとく覆されました。それと同時に、親鸞は単に死後往生だけを救いとして説いたのではなく、人間の生き方・価値基準がその根底から変化させられ、自己中心的であるはずの人間が、慈悲を中心とした生き方を志すようになる宗教として真宗を説いていることを知りました。

▲仏教の授業「親鸞・人と思想Ⅱ」で熱心に学ぶ学生たち。

親鸞は真宗の教えに生きようとする人は凡夫だから何もできない存在だとは決して語っていません。むしろその反対に、世の中のあらゆる苦しみや悲しみを見過ごさないことを願う存在になると説いています。もちろん人間は自己中心な心をなくすことができない存在なので、完全ではないのですが、仏と同じような慈悲の実践を仏によって与えられた心＝信心を根拠として志向し、実践はじめる「しるし」があらわれると説いているのです。親鸞以前の仏教では、仏の慈悲を対照的に捉え都合よく救ってくれる存在を阿弥陀仏と考えられていたのですが、親鸞は人間において慈悲の実践を志向させる〝はたらき〟として仏を理解したのです。すると、阿弥陀仏に帰依することで、仏の願いを自らの願いとした生き方が始まることになります。このように親鸞が、真宗を現実に生きる人のための仏道として理解していたことを知った時、私は様々な疑問を解決する入り口にようやくに立てた気がしました。

真宗は今、冒頭に挙げたような疑問にどれだけ応えうる宗教となっているのでしょうか。原発の問題、靖国神社の問題、格差という差別の問題、貧困、自死の問題など、数えあげればきりがないほど、多くの問題が山積しています。こうした課題に真宗者としてどのように向き合うかを真剣に考えなければ、真宗の未来はないというのは過言でしょうか。

今回の執筆者

筑紫女学園大学 人間科学部
人間科学科 人間関係専攻 講師
宇治 和貴

主編著『地球と人間のつながり―仏教の共生観―』（法蔵館）『科学時代における人間と宗教』（法蔵館）。昨年、永田文昌堂より『真宗の歴史的研究』を刊行。真宗実践論が専門。


※「法海」とは、仏法の広大なことを海にたとえている言葉です。